

平成21年度

## 第43回中国四国医師会連合医学学会

と き 平成21年10月 4日(日) 午前9時から  
 ところ 宇部全日空ホテル

総会議事、唐澤祥人日医会長による 特別講演Ⅰ「国民福祉と医療を支えるために～超高齢社会を越えるみち～」は前号(第2065号・11月15日号)にて既報。

今回の号では、金子みすゞ記念館の矢崎節夫館長による特別講演Ⅱ「みすゞさんのうれいままなごし—まなごしを変えると見えてくるもの—」の講演録を掲載します。

## 【矢崎節夫先生プロフィール】



矢崎 節夫  
金子みすゞ  
記念館 館長

やぎきせつお/昭和22(1947)年、東京生まれ。早稲田大学英文学科卒業。大学在学中より童謡・童話の世界を志し、童謡詩人佐藤義美、まど・みちおに師事。昭和57(1982)年、童謡集『ほしとそらのしたで』(フレーベル館)で、第12回赤い鳥文学賞を受賞する。

自身の創作活動の傍ら、学生時代に出会った一編の詩に衝撃を受け、その作者である童謡詩人金子みすゞの作品を探し続ける。16年ののち、ついに埋もれていた遺稿を見つけ『金子みすゞ全集』(JULIA出版局)として世に出し、以後その作品集の編集・出版に携わっている。特に、永年の努力の集積として執筆した『童謡詩人金子みすゞの生涯』(JULIA出版局)においては、平成5(1993)年、日本児童文学会賞を受賞している。

近年は、全国各地で講演を行い、金子みすゞの魅力を多くの人々に伝える。呼びかけにより、ネパールに金子みすゞの名前を冠した小学校が建設されるなど、その活動は多岐に広がり実を結びつつある。

平成15(2003)年4月、金子みすゞ記念館(山口県長門市)初代館長に就任。

### 「みすゞさんのうれしいまなごし—まなごしを変えると見えてくるもの—」

20世紀、私たちはもしかすると「私とあなた」というまなごしで駆け抜けてきたかもしれません。

自分中心、人間中心のまなごしで。

生かされていることの喜び、この世のすべてと共に生きる喜びは、「私とあなた」から「あなたと私」というまなごしに変わることなく、出会うことはできないでしょう。

みすゞさんの詩をとおして、まなごしを変える喜びに出会ってくれるとうれしいです。

## 【講演のポイント】

- ・まなごしを変える喜び
- ・こだまし合うところ
- ・丸ごと受け入れるやさしさ
- ・違うことのうれしさ
- ・見えないものこそ大切なもの
- ・すべてのものと共に生きること

今、山口県医師会長の木下先生から唐澤先生がみすゞさんの詩をお話下さったとお聞きして、とてもうれしいなと思います。

今日は「みすゞさんのうれしいまなごし」というお話を致しますけれども、実はうれしいまなごしに出会うためには「言葉をもう一度大切に使う」ところから始まるのだと思うのですね。

言葉だけが人を変える力を持っています。人の心柄(こころがら)、見えないその人の心模様が見えるのは、その人の使う言葉だということです。

でも残念ながら、いつの間にか私たちは、昔からある言葉を平然と使って、今その言葉が合わなくなっていることにも気づかないことがあります。

例えば、生命の尊厳に対して、私たちはもし

かしたら言葉で傷つけているかも知れない。

皆さんの中で「そろそろ子ども作ったら」と言っことがある人はいらっしやらないでしょうか。

子どもという命は作れるものではないのです。授かるものなのです。

本来授かるべき命を「作ったら」と言ってしまったその人が、子どもたちに向かって「命は大切だよ」と言っても無理なのですね。作れる命だから捨てることができたし、傷つけることができたのです。

子どもという命は授かるのですから「そろそろ子どもが授かるといいね」と言わなければいけない時代になっているにも関わらず、私たちは「そろそろ子どもを作ったら」と言って恥ずかしさを感じていない。それが20世紀の言葉の世界なのかも知れません。

だから21世紀を前に、金子みすゞさんは蘇りました。

金子みすゞさんの全集が出たのは、25年前です。この四分の一世紀の間に、日本の小学生は、平成8年から全部の国語の教科書で習っていますし、今中学の国語の教科書にも、または高校の英語の1レッスンの中で「金子みすゞ」というコーナーがあったりもしています。

また、この10年で世界10カ国語に訳されていますから、金子みすゞさんという存在は、本来、民族とかイデオロギーとか宗教とは別に、この世の中にいる地球人、人間としてのとても大切に、柔らかいまなざしなのではないかなというふうに思います。

うれしいまなざし-まなざしを変えると見えてくるもの-という話ですけども、まずこんな例がありますというお話をします。

唐澤先生もおっしゃってくださったそうですが、「大漁」という詩を紹介します。

### 大漁

朝焼小焼だ

大漁だ

大羽鯛の

大漁だ。

浜はまつりの

ようだけど

海のなかでは

何万の

### 鯛のとむらい

するだろう。

小学校一年の女の子がこの詩を読んで、「お魚がお弔いをしているということを教えてくれてありがとう」という手紙をくれたことがあります。

こんなことにありがとうと言える子どもがいるんだということに僕は大変ショックで、驚きでしたけれども、当然そんなうれしいありがとうを言ってくれているので、すぐに「うれしいありがとうを教えてくれてありがとう」と手紙を出しました。

もしかすると皆さんは「子どもらしい、かわいの手紙だな」と思われるかもしれませんが、実はそのあとに、この子が変わったということが分かるこんな文がついています。

「でも私は魚が嫌いです」と書いてありました。そしてそのあとに「でもこれからは一生懸命食べます」と書いてあったのです。

「大漁」という詩を読んだ時に、この一年生の子は「お魚は命であって、命をいただいて生かされていたんだ」と気づいた時に、「嫌いだから食べない」という自分が、「嫌いだけど一生懸命食べます」と変わったのです。

特別にみすゞさんの詩の中で、そうしなさいとは書いていないけれども、読む人の心の中で、みすゞさんのまなざしを共有することができる、それが童謡という文学の力だと思います。

実は童謡というのは、子どもの文学だと皆さんは思っいらっしやるかも知れないけれども、金子みすゞさんの童謡は日本人が初めて手に入れた三世代が共有できる文学です。

園児から百歳の人まで、その人の人生観や宇宙観や宗教観が深まれば深まるほど、深く読める、日本人が初めて手に入れた文学宇宙です。たった一冊の詩集で三世代がそれぞれの思いで話すことができる、極めて稀な深いまなざしを持った文学だと思います。

「積った雪」というこんな詩があります。

### 積った雪

上の雪

さむかろな。

つめたい月がさしていて。

下の雪

重かるな。  
何百人ものせていて。

中の雪  
さみしかろな。  
空も地面(じべた)もみえないで

よく仏教界で講演会があるのですけれども、清水寺の森清範貫主とご一緒することがあります。森先生もみすゞさんが大好きですから、この詩について「中の雪のことを考えたことがなかった自分が恥ずかしい」っておっしゃったことがあります。「金子みすゞさんは、雪を見ると雪になれるんだ。それが凄い。人間と雪ではなくて、雪の私と人間になれるんだ」ということに、森先生は大変感動されているんだそうです。

同じく70代の北海道のある村の村長さんが、私たちを迎えてくれて、この詩を誦んじて下さった後に、突然ハラハラと泣かれました。「どうしたのかな」と思っていたら、こんなふうにおっしゃいました。

「私は70歳になるまで、毎年たくさんの雪を見てきた。でも一度も中の雪のことを考えたことがなかった。こんな大切なことに気づかないで、この歳まで生きてきた自分が恥ずかしい」とおっしゃいました。そしてこれからは「みすゞさんの詩を読んで、一つひとつ自分の心の中に置いて生きていけたら、生まれてきてよかったな、そして亡くなる時も今まで生きてきて良かったなと思って、この人生を去れます」というふうに言って下さったことがあります。つまり、年齢を問わずみすゞさんの詩の中で、それぞれの思いでみすゞさんの詩を読むことができるんだということだと思います。

いま日本中の方が、少なくとも小学生が一番よく知っている詩は「私と小鳥と鈴と」という作品です。

この作品の一番最後に「みんなちがって、みんないい。」昨日、ちひろさん\*1と一緒に手話をしながらやりましたね、あの「みんなちがって、みんないい。」です。

実は金子みすゞさんは、「私とあなた」ではなくて「あなたと私」という人なのです。

もし、「みんなちがって、みんないい」が、私と小鳥と鈴の私を優先して考えると、「みんなちがって、みんないい」は成り立たないですね。だって、「私の勝手でしょう」とやってしまうからです。

でも、みすゞさんの詩は、昨日皆さんがちひろさんと一緒に手話をやって下さったからわかりますよね、タイトルは「私と小鳥と鈴と」で私が先に来ていますけれども、あの作品をずっと読んでいくと、まなざしが変わるんです。

どう変わったかっていうと「鈴と、小鳥と、それから私」と、私が後になるのです。

私が後にならない限り「みんなちがって、みんないい。」は成り立たないのです。

だから、どんなに素敵な人でも、私を優先してしまうと、自分が段々とあがっちゃうんですね。

私の方が上に上がってしまうから、向かい合ったあなたに「なぜわからないの、どうしてわからないの、こんなに言ってるのに。何で私のことわかってくれないの」といつも上から言葉をぶつけます。

でもそれはアップスタンドですから、理解することはできないのです。本当は「あなたに理解してくれ」という前に、「私があなただけを理解しようと思わない限り成り立たない」のに、私たちは相手に負担をかけるのです。

理解するというのは、英語でちゃんとならいました。「understand」「下に立つ」なのです。自分優先のまなざしを相手のところに下ろさないと理解できないというのが、「understand」です。この瞬間、私を優先にしていたのが「あなたと私で一つだ」ってことに気づくことができるのです。

これを仏教で言うと「南無」です。

「南無阿彌陀仏」「南無釈迦牟尼仏」「南無妙法蓮華経」の「南無」です。

みすゞさんはこれを「こだま」という言い方をします。これがみすゞさんの宇宙の中心的なまなざしです。

「私とあなた」じゃなくて、「あなたと私」というのを、小学生の人に説明する時はこんなふうに言います。

「皆さんは自分を人間だって知っていますか」っていうと、小学生の人はみんな「知っている」と言います。みんな「人間だよ」と言います。「ああ、そう。じゃお父さんお母さんが君は人間だよって教えてくれたの」っていうと、「違うよ、誰も教えてくれないけどわかっている」と。「ああ、そう、誰にも教えてもらってないけどわかっているんだ。でもね…」

「本当に自分が人間かどうかは、誰にも教えてもらわないけどわかっている」っていうけど、

「誰かが気づかせてくれたんだよね」「じゃあ、もしみんなが生まれてすぐに犬の中にすくと置かれたら、自分は何だと思いますか」と言ったらさっきまで人間だと言っていた子が「あ、犬だ」って言います。

そうなんですよ。

犬だということと、私たちが人間だと認識できたのはたった一つ。向かい合う、あなたという存在がいるからです。

「こんな根源的なことを認識させてくれたのは、私以外のすべての人です」。お父さん、お母さん、お医者さんを含めたすべての周りにいてくれる人がいて、私を人間と認識させてくれたのです。

だから「私を私であらしめてくれるのは、私じゃなくて、あなたという向かい合った人」です。そのあなたがいることで私がいるのに、数年経つうちに私を優先してしまうのが人間の愚かさであって、人間動物からどれだけまなざしを変えて、「あなたと私」になった時に、私たちは人間という姿が変わるのです。

でも、自分優先で「私とあなた」である限り、人間動物でしかありません。

本当に今、人間動物のまま大人になった人がいるから、自分で自分を殺すことができないから、人を殺して死刑になりたいという大人が出たのです。

あの方達は、人間とは言わないのです。

あの周りの人達があの人を育てなかったということ。人間動物のままでおいてしまったということ。

人間になれるかどうかは、こんな私で恥ずかしと、自分の恥ずかしさに気づいた時にはじめて、「無慚愧は名づけて人とせず、名づけて畜生とす」と涅槃経に書いてある通り、恥ずかしいと気づいた時から人は良き人の方に向かって歩くことができるのです。

それには、私を優先しないで、「あなたと私」という共有のまなざしに出会った時に初めて成り立つのです。

赤ちゃんは生まれた時に、お父さんお母さんを見て、お父さんお母さんがいて自分があるんだって、ちゃんとお父さんお母さんに向かって笑顔を出すことができます。私がいるからお父さんお母さんがいるとは思っていないのです。

でも、少し年を重ねるとその位置が変わってしまうのは、私たち人間のやりがちなところなのです。だから意識して、そのまなざしを

あなたの方に一度置いてみないと、もしかすると私たちは、急ぎ過ぎて物事をするようになるのです。

例えば、「私とあなた」を「親と子」だとすると、私は親ですから、子どもに一生懸命「ああして欲しい、こうして欲しい」というこちらの願いだけを伝えます。でも考えてみると親の私がいなくて、子どもが生まれたわけではありません。

「子どもが生まれて親にしてくれた」のでしかないのです。子どもがしてくれた親なのです。

そう思ったら、子どもがしてくれた親として、何が出来るかなって考えると、少し時間がゆっくりと過ごすことが出来るけど、親と子だと思えば、こちらの思いを早く伝えたいと思って、急ぎ過ぎてしまうのです。

これはお医者さんと患者さんでも同じです。

「お医者さんと患者さん」だと思えば、お医者さんは一生懸命、この人のためにと考えてくださるけれど、でも患者さんがいないと、お医者さんは成り立たないので、「患者さんがしてくれた医師」なんだと思えば、医者としてこの人に最善何が出来るかな、と考えてくださったら、言葉遣いが変わってくるし、まなざしも変わってくるのです。

つまり私たちは、二つで一つなのに、つい自分を優先にしてしまうのです。

「あなたと私」で、どちらが大切かというところも一緒です。私から見ると皆さんがあなたですけど、皆さんから見ると私があるから、私たちは誰もが自他一如なのです。つまり、「患者さんの私とお医者さんの私」がいるだけなのです。そちらの患者さんもそちらの私であり、こちらのお医者さんもこちらの私でしかありません。そういうまなざしがあったから、あなたの痛みは私の痛みになることがあったんですね。かつて、私たちの国はそういう国だったのです。

でも、私を優先に考えると、あなたの痛みはあなたの痛みなのです。私の痛みは、あなたわかってと言いたいけれども、あなたの痛みを私の痛みと共有できなくなったのは、自分のまなざしを自分優先にしてしまったからです。

だから今、金子みすゞさんは蘇って、ちょっと変えてみましょう。もう一度、かつて誰でも持っていたそのまなざしを少し自分の中で、戻してみたらいいなあということだと思います。このまなざしがないと、「大漁」という詩は書けなかったのです。

大漁

朝焼小焼だ

大漁だ

大羽鯛の

大漁だ。

浜はまつりの

ようだけど

海のなかでは

何万の

鯛のとむらい

するだろう。

僕は今から43年前に、岩波文庫の「日本童謡集」の中で、この一編の詩に出会った時に、北原白秋や野口雨情や、西條八十の他の詩が全部消えるくらいの衝撃でした。

そしてそれから16年間のみすゞ探しのあと、弟の上山正祐(雅輔)さんに出会って、3冊の手帳をお借りして、今から25年前に全集を出すことができました。

なぜ私にその時に衝撃を受けたかという、わずかに10行の中に、生きることと死ぬことが明確に書いてあったのです。

それまでずっと私は 大漁という、浜は祭りのようだと終わっていたのです。大漁節の世界で。もちろん、人間からすれば、お魚がたくさんとれることは喜びです。だから「あ、良かった良かった」とずっと思っていました。

つまり、「私と鯛」だったのです。私が生きるためには、鯛は食べられて当たり前としか思っていませんでした。でも、初めてみすゞさんのこの詩を読んだ時に、その後の

海のなかでは

何万の

鯛のとむらい

するだろう。

という、捕らえられた鯛側から見せられた時に、「私と鯛」が、「鯛と私」に変わりました。

私は、ずっと自分で生きているんだと思ったけれど、私は鯛君によって、お米君によって、他の代わってくれたすべての命によって、生かされていたしかないのである。

本当に、人間は自分優先で考えてしまうから、私が私がとやってきたけれども、この私を私で押しつけてくれるのは、私以外のすべての人間

を含めた、すべての動植物を含めた、あらゆるものによって、私は私であらしめてもらっているんだと気づいた時に、「私と鯛」が「鯛と私」に変わったのです。

そのことが「あなたと私」というまなごしの出発点でした。この「大漁」という詩を読むと、この世の中はすべて二つで一つだということがわかります。浜のよろこび と 海の悲しみ喜びと悲しみで一つです。目に見えることと見えないことで一つです。生きること死ぬことで一つです。すべて二つで一つです。

この二つで一つをきちっと具現化してあげることができるのは、たった一つ、こだますことなのです。

だから、みすゞさんの512編の宇宙、星々の中の中心星は「大漁」という作品ですけれども、そこに彗星のように回っているまなごしは、「こだまでしょうか」というこんなかわいい詩だったのです。

こだまでしょうか

「遊ぼう」っていうと

「遊ぼう」っていう。

「馬鹿」っていくと

「馬鹿」っていう。

「もう遊ばない」っていうと

「遊ばない」っていう。

そうして、あとで

さみしくなって、

「ごめんね」っていうと

「ごめんね」っていう。

こだまでしょうか、

いいえ、誰でも。

みんな こだまだったのです。かつて私達の周りにいてくれた、素敵で大人の人にはキチッとこだましてくれました。

例えば、僕が転んで「痛い」と言った時に、僕の父や母は「痛いね」ってこだましてくれました。だから僕の痛さは半分になりました。おじいちゃん、おばあちゃんももっと上手に「かわいそうだね、かわいそうだね」「痛いね、痛い

ね」と何度も何度もこだましてくれて、時にはこちらの痛さはもう消えてしまってもまだ言ってくれて、そのあとで初めて自分の言いたいことをいいました。「泣くのを止めようよ」とか「我慢しようよ」と言ってくれました。

だから、キチッとこだまして、受け入れてくれる人、うなずいて受け入れる人たちに囲まれた世代は、この世の中を去るまで、心の中の寂しさや悲しさや辛さという器をいっぱいにすることなく、去れるようになっていました。

でも、とても残念なことに、20世紀のある時から私達の国は急ぎすぎました。日本の国語教育でもそうです。

自分の言いたいことを言いなさい。

自分の意見をキチッと言いなさい。

それだけ教えたのです。

自分の言いたいことが言えたら、相手の言いたいことを聞くという、もっと大事なことに至らないで、言いたいことだけ言いなさいで終わってしまったような国になったのです。だからみんな「私が、私が、私が」と言ってきたのです。

実は「自分、自分」という言葉はすごく魅力的な言葉で自分というの、仏教の言葉で、「自然(じねん)分身」からできているのです。「自然の分身でしかない」と言っているのです。

そしてその分身である私達がいなければ、自然全体もならないのです。部分は全体を反映すると言われますけれども、自分というの「自然分身」、私は小さなものだと気づくことから始まったのに、自己主張になってしまったのです。「自分、自分」って言ってしまったのです。

でもそうじゃありません。こんなちっぽけな私だけけれど、あの大きな自然も宇宙も、私という存在がない限り成り立たないってところが凄いことなのに、私たちはそのことに気づかなかったのかも知れません。

だから、こだますこと、頷いてあげることの一番大切なのは、まずキチッと頷いて受け入れてあげることなのです。

小学生の人に「優しい人になりたい人」「意地悪になりたい人」どっちですか、と聞くと「優しい人になりたい」と言います。

みずゞさんは「さびしいとき」という詩で、そのことをきちんとこんなふうには言っています。

#### さびしいとき

私がさびしいときに、  
よそのひとは知らないの。

私がさびしいときに、  
お友だちは笑うの。

私がさびしいときに、  
お母さんはやさしいの。

私がさびしいときに、  
仏さまはさびしいの。

神様や仏様という最良最善の存在は、私達が祈ったり願ったりしても私たちの寂しさをとってくれたり、代わってくれることはないということです。ただ、最良最善の存在はキチッと頷いてこだましてくれるということです。

私がさみしいと思った瞬間、私の中にいてくれる最良最善の存在が「さみしいね、悲しいね、辛いね」とこだましてくれるから、最良最善の存在なのです。しかし、どんな最良最善の存在でも、私たちから寂しいことやつらいことや悲しいことは無くさないのです。

なぜかという、もしこの世の中でたった一人でも寂しいことや悲しいことや辛いことが、完璧になくなってしまったら、その人は果てしなく傲慢になって、人を傷つけてもいじめても殺しても平気な人になってしまうからです。

それだけではなくて、大切なあなたの辛い時に、こだましやすくするために、横には置いてくれるけど、無くさないで置いてくれるお陰で、あなたという大切な人が辛いといった瞬間に、自分の中の辛さがまたスーッと戻ってきて、こだましやすくしてくれるのです。「つらいよね、悲しいよね、寂しいよね」と。だから、最良最善の存在は「こだましてあげることだ」ということです。

お医者さんっていう存在は、患者さんにとって最良最善の存在なのです。お医者さんに自分の一生の命を託することができるのです。その時に「大丈夫だよ、痛くないよ」って言われるのと「痛いよね、辛いよね」と言って下さるのは多分患者さんの心の喜びは違ってくるだろうなと思います。

じゃあ、お母さんはどうするかというと、「私がさびしいときに、お母さんはやさしいの」というのです。

お母さんはいいですね。みずゞさんのお母さんは「寂しくない」とか「頑張れ」とか言わな

いのです。

人間頑張っているんですね。生きていうことは本来頑張っていることですから、そして病気になって、その上で頑張れと言われたら、本当に患者さんは堪らないけれども、やさしくしてくれれば、患者さんは幸せになります。

やさしいというのは漢字をみるとどういふことかわかります。憂いを持っている人がいたら、その横に立って、こだましてあげることが「優しい」という字です。だから優秀の優という字なんです。人偏が付いているのです。

憂いを持っている人の横に立って「痛いよね」「辛いよね」と添ってあげることが優しさの本質です。

だから子どもが転んで「痛い」と言った時に、「痛くない」と言ったお父さんお母さんは優しくなかったということです。もうその瞬間から親を辞め始めているということです。子どもにとって。そのことに私たちは気づかなかったということです。

僕は子どもが転んで痛いと言った時に、すぐ「痛くない、泣くな」と言いました。このお父さんなら、このお母さんなら愛してくれると思って生まれてきた子ども達です。その子の痛さを一方的に痛くないと言った時、泣くなと言った時、その子達はどんな思いだったのでしょうか。何で僕の痛さを、私の痛さを、お父さんは、お母さんは痛くないというんだらう、泣くなというんだらう。痛いのは僕なのに、泣きたいのは私なのと思った時、とても切ない思いでいたはずです。そして、一度も頷いてくれないで、一方的に否定し、励ました人は、その子ども達は全部、痛さや悲しさを自分の器の中に押し込むしか無かったのです。

もう今やその器がいっぱいになってしまう子が、小学校の上級生くらいでもいるから、その子達は新しい寂しさや悲しさや辛さを入れられないので、どうするかというと、一度その器をひっくり返して空にするのです。

次の準備をするために。

その時に、僕のような大人はなんて言ってきたかという、「何であんな良い子があんなことをするんだらう」「なんであんな優しい子があんな事を言うんだらう」「こわいねえ」と言いました。そして一番楽な全部外のせいになりました。

「時代が変わったんだ」「世界が変わったんだ」「学校が変わったんだ」と、でも時代を変え

たのも、社会を変えたのも、学校を変えたのも子どもではありません。

私たちが忙しすぎたのです。

本当は相手の話をキチッと受け入れて、こまだしてあげることだけが優しいことだったのに、私たちは「痛い」と言った時に「痛くない」と否定することで、痛さを消せると傲慢にも思ったのです。

だから、今、金子みすゞさんは蘇って、もう一度思い出しましょう、頷いてあげられたら、頷いてくれたら、どれだけ相手の人の気持ちが楽になったか。たったそれだけで人間の中の、もしかしたら、エネルギーは少し変わるチャンスがあったかも知れないのに、ということなんだと思います。

今日は1時間ぐらいしかありませんので、少しこの先へ急ぎます。

みすゞさんにとってこの地球上のすべての存在は「いるだけで良いのです」「存在するだけで良いのです」。

それは「土」という詩を読むとわかります。

こつつん、こつつん、  
打たれる土は、  
よい畑になって、  
よい麦生むよ。

朝から晩まで、  
踏まれる土は、  
よい路になって、  
車をとおすよ。

打たれぬ土は、  
踏まれぬ土は、  
要らない土か。

いえいえ、それは、  
名のない草の、  
お宿をするよ。

地球というお母さんにとって、地球上のすべてのものはいるだけでいいのです。存在するだけでいいのです。

しかし、とても残念なことに、最後の子どもである私達人類が「これは役に立つ」「これは役に立たない」といって、木を切ったりいろいろなことで自然を壊したりしていますけれども、地球というお母さんにとっては、地球上のすべて

のものはいるだけでいいのです。存在するだけでいいのです。

人間も同じです。子どもという存在はお父さんお母さんにとって「いるだけでいい」のです。「存在するだけでいい」のです。「誰もが生まれただけで100点満点」なのです。もちろん障害を持って生まれた子もいるし、いろんな子もいるだろうけど、その子も100点満点なのです。それは私たちが障害と決めただけであって、その子の持っているものからすれば、それが100点満点なのに、私たちはその事を忘れます。

例えばテストで10点しかとらなくても、その子は10点の子じゃないのです。

100点という尊厳がプラスしていますから、110点の子どもです。テストで0点でも、その子は、0点の子ではなくて、100点満点の、今テストが0点の子でしかないのです。

でも私達は急ぎすぎるとそのことを忘れて、目の前の点数でその子を考えてしまいます。でも、お父さんお母さんにとって、子どもはいるだけで良いのです。存在するだけでいいのです。

今私が、子どもという話をする時、皆さんは自分のお子さんや患者さんの中のお子さんのことを思うかもしれませんが、それは見える命だけを見ているからです。

私たちは「見える生命」と「見えない命」の狭間で生きています。

皆さんのお父さんお母さん、見えない命のつながりからすれば、いまだに皆さんお子さんです。でも私たちは、60, 70, 80になると、自分はもう大人で子どもではないと思ってしまうけど、それは見える命だけを見ているからです。自分のご両親から見れば、100歳になっても私達はいつでも変わるチャンスのある子どもなのです。

だから今私が、「子どもはいるだけで良いのです」というのは、皆さんも入っているということです。だから本来大人の仕事は、小さな人達に向かって「いてくれるだけでいいよ、生まれてくれただけで100点満点だよ」というのは大切な仕事でした。

でも私達は今そのことを言わなくなっているかもしれません。もっと大切な言葉を、言わなくなったなと思わせてくれたのは、神戸の地震の時でした。

神戸の地震の時に、お父さんとお母さんが耳の聞こえない方がいらっしゃいました。小学校5年生の女の子は耳が聞こえました。ですから

水の配給や、お弁当の配給はその5年生の女の子が、お父さんお母さんに代わって取りに行っていました。それをテレビがずっと映していました。そして最後に、お父さんとお母さんとその子に座ってもらって、ご両親にその子について語ってもらいました。

まずお母さんがテレビの画面いっぱい映られてこんなふうにおっしゃいました。

「この子がいなければ、私たちは生きていけませんでした」とお母さんが言いました。次に、「この子は」って言った瞬間、声が震えたのです。そこでカメラマンは、ハッと気がついてカメラをずっと引きました。今までお母さんがアップで映っていましたが、今度はお父さんとお母さんとその子が映りました。

実は、ご両親とも耳が聞こえないので、口を開けていても言葉にはなっていなかったんですね。何をしていたかということ、手話をしていたのです。そして、その手話をこの子が通訳していたんです。

だから最初に言った、「この子がいなければ私たちは生きていけませんでした」というのは、いつもお父さんお母さんの通訳をするように普通に通訳ができたんだけど、次に「この子は」って言った瞬間、この子が気がついちゃったのです。今、お母さんが言ってるこの子って、自分のことだと。そこで胸がいっぱいになって声が震えたのです。

お母さんはなんて言ってあげたかということ、「この子は、私たちの生命の恩人です」ってお母さんが言いました。

次にお父さんが手話をしました。その瞬間、女の子の目に涙がわあーと溢れて、その涙をこぼさないように、上を向きながら一言一言紡ぐようにお父さんの手話を訳しました。お父さんは何て言ってあげたかということ、「この子は、私たちの宝物です」って言ったんです。

何といい言葉をいい時にお父さんは言ったんでしょうか。なんといい時にその子は聞けたんでしょうか。間違いなくその子はお父さん、お母さんにとって宝物です。いえ世界中の子どもは世界中のお父さんお母さんの宝物です。

でももしかすると、かつて誰でも聞いていた。ここにいらっしゃる先生方も誰もがかつて聞いていたこの言葉を大切なわが子や、大切な患者さんや、未来のある小さな人達にとって、今私たちは言っていないのです。本当に言っていない時代になりました。



私は、この25年、年間70回から100回の講演をずっとやっていますけれども、小学校へもたくさん行きます。いつもこう聞きます。

「皆さんは、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、幼稚園、保育園の先生、小学校の担任の先生、校長先生、皆さんを一番愛しているべき大人から、宝物だよ、お宝さんだよって聞いたことのある人どのくらいいますか」と聞きます。

4年前までは1割はいたんです。今、4年前から、今年にかけて、誰も手を挙げない学校がほとんどになってしまいました。その瞬間、学校の先生がみんな凍ります…その瞬間。でも困って当たり前です。先生すら聞いてないので。宝物と思っていない先生が生徒を愛せますか。

こんな大事な言葉を言わないで、大人でいるということの恥ずかしさに気づかないことの方が、教育者としてはなっていないのです。でももしかすると皆さんだって、言っていないかも知れないのです。

私は言っていると思っているかもしれないけど、いくら私は言っていると思っても、言ったら相手もお父さんもお母さんも宝物だよって言ってこないと届いたことにならないですよ。たいていの人は「私は言った」と思っているだけです。でも自分の言いたい時に言っただけであって、相手が聞きたい時に言っていないんです。だから届いていないのに大人は無責任に届いていると思ってしまうのです。

言葉の原則は、「うれしい言葉は流れやすい」というのが原則なのです。だから繰り返し言ってくれなきゃいけないんです。だって言って欲しいじゃないですか。うれしい言葉は、だから繰り返し、繰り返し言えるように流れやすくなっているのですね。

逆に辛い言葉は1回か2回でつくんです。でも私達は逆なんですよ。辛い言葉や聞きたくない言葉をたくさん言わないとつかないと思うから、散々言って僕なんかたくさん言った上に、漬け物の重しを載せて、その上に乗っていたような思いがありますから、どんなに宝物といっても、多分嫌な言葉しか残ってなかったでしょう。

言葉の原則は、「うれしい言葉は流れやすいからたくさん言う」「辛い言葉は一回か二回で止める」。このことをやったら、私の周りはずっと明るくて、もっとうれしい言葉に溢れてくるのに、いつの間にか大人は自分を優先に相手は聞いて

いると思ってしまったのです。

でも聞く方からしたら、たくさん言って欲しい言葉は、何度でも言って欲しいなという言葉は言わなければいけないのは、誰でもないこちらなのです。

だから必ず言います。その子達に今日帰る時に先生が絶対言ってくれるから。そして帰ったらお父さんお母さんに聞いて下さいって言います。

なぜ聞いて下さいっていかというと、日本の国語教育にはないのですけれども、「言葉の原則は最初に聞くのは自分」だからです。患者さんじゃないのです。相手じゃないのです。

私たちは相手が聞くと思って、日本の教育はされていますから、だから嫌な事も言えるんですよ。だから友達をいじめたりする言葉をどんどん言えるのです。

でも実は、言ってる人が先に切れるんですよ、嫌な言葉を言う人って。それはなぜかというは無意識で自分が聞いているからです。だから言葉では堪らなくなったから手を出すのです。つまり「最初に聞くのは自分」です。

だから宝物だよってお父さんお母さんに言ってもらったその瞬間に変わるの、お父さんお母さんなのです。言ってしまった自分があるので、いかなかった自分とは違ったまなざしで子どもに向かうチャンスがあるからです。

だから、言ってあげて欲しい。

今の若いお父さん、お母さんはなかなかそういうことを言ってくれないので、小さなお子さんが患者さんで来たら「君はお父さん、お母さんの宝物だからね、早く元気になろうね」って言ってあげるだけで良いのです。その言葉でお父さん、お母さんが育つのは凄いいことだと思うのですね。

だから、皆さんはもう医療は完璧にできでしようけれども、そこに言葉を足していただいたら、実は患者さんの治りはもっと早くなるだろうと僕は思っています。

僕は大人ですけども、インフルエンザの注射を打つ時、主治医の光永クリニックの光永眞之先生は、本当にこちらが恥ずかしくなるくらい「痛いですね、痛いですね、ごめんなさいね、痛いですね」ってしてくれるんです。

先生、僕は大人だからそんなに言わなくても良いですよと思うんですけど、うれしいですよ。その時に痛いと言えないですからね。

でも、それはそのお医者さんは患者さんの僕

を自分のことのように思ってくれるから言ってくれるのです。

だって、刺されたら痛いですからね。ごめんなさいねといいながら打ってくれます。僕は光永先生は大変なプロだと思うのです。

プロというのは、相手の方に立てるかどうかです。プロかどうかとても大切なことなんだと思うんですね。

例えば、僕は順天堂病院で生まれているんですけども、私の家内も順天堂病院で胃がんの手術をしました。

手術をする前にお医者さんに呼ばれて、3分の2取るだけでしたけども「3分の2取っても、世の中には普通に仕事をしている人はたくさんいますから」とそのお医者さんは言ったのです。僕、その時ムツとしたのです。

「先生が今おっしゃっているのは、家内のために言っているのですか。それとも、そういうことを言うとマニュアルに書いてあるから言っているのですか」と言いました。だって、患者さんには一般論は役に立たないのです。世の中に、いくらでもありますというのとは関係ないのです。患者さんは私(自分)の事だけを考えているのですから。

そして「これだけの病院だったらお医者さんの中にも胃がんの手術をした人いるじゃないか」「そういう人でも今ちゃんと病院に来て、患者さんを治療して、元気にしますよ」って言うてくれたら、自分のいる病院の中の先生が、そうなんだと思ったら私の家内にとってはとても励みになります。だから「先生の言っているのは他人事ですから、それはまったく役に立ちません」って言いました。

その先生はとてもいい先生だったので、その後「すごく申し訳ない」といって下さり、家内が手術した後に、ご自分も胃がんの手術をした先生がわざわざ訪ねてきてくれて、「僕も元気になっていますから大丈夫ですよ」と言ってくれました。

順天堂病院がすごいと思うのは、そういう応えてくれる先生がいるからなんですよ。病院が凄いいじゃなくて、先生がどうかなんですよ。先生が患者さんにどう向かい合ってくれるかで、その病院が良いか悪いか決まってくるのだと思うのです。だから、その人の使う言葉がとても大事なんだと思います。

さて、みすゞさんの「みんなちがって、みんな

ないい」いう言葉は、今日本の子どもが一番知っている詩ですけど、こういう詩です。昨日もちひろさんが歌ってくださいましたね。

### 私と小鳥と鈴と

私が両手を広げても、  
お空はちっとも飛べないが、  
飛べる小鳥は私のように、  
地面を速くは走れない。

私がかからだをゆすっても、  
きれいな音は出ないけど、  
あの鳴る鈴は私のように、  
たくさんな唄は知らないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、  
みんなちがって、みんないい。

「みすゞさんの『みんなちがって、みんないい』の中には、人を殺す人も入るの」って小学生が聞いてくれましたことがあります。

みすゞさんの『みんなちがって、みんないい』の中には、人を殺す人は入れません。なぜならば「鈴と小鳥と、それから私」という「あなたと私」(の関係)にならない限り、『みんなちがってみんないい』は成り立たないからです。

人をいじめたり、傷つけたり、殺す人は「私とあなた」なのです。私が主でああなたが従の考え方をする人です。

だから、今進行形である限り、絶対にそういう人はみすゞさんの『みんなちがって、みんないい』には入れません。でも「もうしない」と決めたら、いつでも入れる世界が『みんなちがってみんないい』なのです。

みすゞさんの故郷は本当に思いの深いところです。木下先生の故郷でもありますけれども、世界に誇れるものが3つあります。

一つはみすゞさんです。

今あのローマ法王、前のパパでもみすゞさんの詩を読んで涙をこぼしたといえますから、世界に誇れるものの一つはみすゞさんです。

もう一つは鯨のお墓があります。

今日は高知の方もいらっしゃいますけど、高知にもお墓がありますけれども、今日本中に50数基お墓があるんですけども、仙崎・青海島の鯨のお墓には、78頭ともいわれる鯨の胎児が実際に埋葬されています。そして捕った鯨には

全部戒名がついています。過去帳が残っています。

浄土宗のお寺ですから、「誉」という字、これは人間では五重相伝(ごじゅうそうでん)という教えを受けないともらえない誉号(よごう)という戒名を鯨につけています。それは世界で、仙崎青海島の鯨のお墓とお寺だけです。

そしてもう300年以上にわたって、あの戦争中も鯨と海のすべての命に対する法要を欠かすことなく、毎年4月には「鯨回向」「鯨法会」というのをやっているのは世界でここだけです。

今、シー・シェパードの人達が過激な行動をして、捕鯨を禁止しろなどと言っていますけれども、あの人達は何て言ってるかという、「私たちは肉食主義です。鯨は食べません」と言っています。

肉食も命です。植物も生命なのです。植物の命は食べてもいいけれども、動物の命は食べていけないというのは、それこそ差別です。

生命は同じです。それぞれの文化の中で、命をいただいて生かされていることに気づくことが大切なのです。

その仙崎・青海島の向岸寺(こうがんじ)という過去帳のあるお寺は、一昨年も仙崎へ鯨が2頭入ってきてしまったのだそうです。その鯨に新しくちゃんと戒名をつけて、亡くなった鯨の命に対していまだに法要をやっています。

日本の小さな島の小さなお寺が命に対して向かい合っているのと、あの過激な行動をして、たくさんのお金をもらっている人たちと、私達はどっちの人になるか、選ぶのは私たちです。みずゞさんのまなざしはそういうところから来ています。

そして三つ目は、日本で最初の子どものための宗教活動「子ども念仏会」をやったのは仙崎・青海島の西円寺(さいえんじ)というお寺です。

それは知恩院が認定して、イギリスの学者が世界で最古の子どものための宗教活動ではないかというふうに言ってらっしゃるそうですけれども、とにかくみずゞさんの故郷は「生命」と「子ども」というものに対して、とても優しいまなざしをもっていました。

だからみずゞさんは「いのちの年」と「いのち年」を知っていたのです。この場合の「いのち」は平仮名です。「いのちの年」は自分の年齢です。だから僕の「いのちの年」は今62歳です。皆さんの「いのちの年」は自分の年齢です。

でも「の」をとってしまった「いのち年」、

僕の「いのち年」は、年齢プラス137億年です。137億年前、ビッグバンが始まりこの宇宙ができたからです。そこから、延々と築いてきた「いのち」です。

小さないのち年は年齢プラス40億年です。

46億年前に地球ができ、40億年前に最初の「いのち」ができて、その「いのち」が一度も切れることなく30億年海にいて、植物が地上に上がって、二酸化炭素を吸って酸素を出してくれたお陰で、魚が両生類になり、は虫類になり、ほ乳類になって、ついこの間「いのち」をいただきました。私たち人間は。

地球というお母さんが生まれてから作ったものは二つです。

「いのち」と「酸素」です。

この二つのうち、どちらかがなければ、一瞬にして、私達は生きていけないようになっています。

実は皆さんが今ここにいるというのは、奇跡です。本当に奇跡です。

でも私たちは自分が生まれるということ、「いのち」をバトンタッチしてここにいるということの奇跡さを忘れていきます。

私たちの地球というお母さんは、46億年の中で、3回全球凍結したと地質学者は言っています。赤道の真下にも氷河期の跡がいまだに残っているのだそうです。22億年前に一回、7億5千万年前に一回、そして6億年前に一回、地球は全球凍結したそうです。

水が凍ると生物は生きていけませんから、地球の「いのち」は3回絶滅したのです。

でも、私たちは今ここにいますし、この地球上のすべての「いのち」は今ここにあります。

それは、本当に奇跡のようにわずかに凍らない温泉のようなところに、バトンタッチをしていた一つの「いのち」の集まりがあったのです。でもそれも3回クリアしないと今皆さんはここにいないのです。

これは奇跡です。

それだけではなくて6500万年前にわずか10キロの隕石がメキシコのユカタン半島に落ちた時に地球上の96%の「いのち」は消えたといえます。恐竜が絶滅した時です。私達の祖先はわずか4%に残っていたのです。

3回の奇跡をクリアできて、4%に残って今いる地球上のすべての「いのち」です。

それなのに、すべての地球上の「いのち」の中で、人間だけが殺しあっているのです。本当に私達は、しっかりと自分たちの生命の尊厳を

もう一度思い出さなければならぬのです。だから、もう「万物の霊長」という言葉は返さなければいけなくなっている時代なのです。

まず「傷つけあわない、殺しあわない」ということが本来の「いのち」の尊厳なのに、人間は「それはDNAの中に組み込まれているから」とか言う人もいますけれども、たとえ組み込まれていても、私たちは知性と理性を手に入れることができたので、人間としてここにいるのです。

そしてこのことを医師である先生方が、小さな人達に向かってでも、「いのち」の大切さを伝えて下さったら、世の中はどんどん変わっていくんだろうと思うのですね。

僕は、それぞれの分野の人がそれぞれの言葉で「いのちの尊厳」を熱く語ってくれたら、まずその命を傷つけることの恥ずかしさに気づくチャンスはあるだろうと思うのです。だからそのことを熱く思います。

私たちは自分という「いのち」は1回しかないのです。40億年の中で、1回きりだから大切に美しい「いのち」です。

1回きりだから大切に美しい皆さん一人ひとりです。だから「いのち」の尊厳は、誰一人として傷つけてはいけない、いじめてはいけない、殺してはいけないということです。そのことをもう一度今、私たちは思い出さなければいけないと思うのです。

金子みすゞさんの詩は、実は終わり方がいいんですよね。例えばこういう詩があります。

### 星とたんぽぽ

青いお空の底ふかく、  
海の小石のそのように、  
夜がくるまで沈んでる、  
昼のお星は眼に見えぬ。

見えぬけれどもあるんだよ、  
見えぬものでもあるんだよ。

散ってすがれたたんぽぽの、  
瓦のすきに、だァまって、  
春のくるまでかくれてる、  
つよいその根は眼に見えぬ。

見えぬけれどもあるんだよ、  
見えぬものでもあるんだよ。

この「見えぬけれどもあるんだよ」という二つのフレーズは、今この詩がテレビで、非破壊検査機構というところのCMでやりますけれども、皆さんは「星の王子さま」で、「大切なものは目に見えない」という言葉をご存じかも知れませんが、「星の王子さま」はみすゞさんが書いた18年後に書いているわけですから、みすゞさんは遙かに前から気がついてたということですね。だから大切な言葉を民族を超えて気がついてるんだということでもあります。「露」という詩はこんな詩です。

### 露

誰にも言わずに  
おきましょう。

朝のお庭の  
すみっこで、  
花がほろりと  
泣いたこと

もしも噂が  
ひろがって、  
蜂のお耳へ  
はいつたら、

わるいことでも  
したように、  
蜜をかえしに  
ゆくでしょう。

終わりが良いので、最初を読みたくなるのです。また終わりが良いから読みたくなるので、繰り返し読むようになります。

20世紀は、「出会いと別れ」の世紀だったかもしれません。良い出会いをすることだけを一生懸命したのです。良い出会いを一生懸命探して、別れ方が残酷だと次に会うことはなくなるのです。

でも21世紀は「別れと出会い」なのです。良い別れ方をすることから、うれしい出会いがあるのです。

だから「おはようございます」も大切だけど、「おやすみなさい、また明日」の方が遙かに大切になってくるということです。

それだけではなくて、緩和ケアの大会でもお話をさせていただきますけれども、本当は、あ

と数時間のいのちという患者さんがいたら、ICUの中では終わらないで、家族と別れる部屋がそろそろ病院にあってほしいな、という気がしています。

緩和ケアのところはちゃんとあるんですけども、他の病気の方はそういうことができないというのは、それは死としての尊厳をお医者さんが全部管理してしまうような気がするのですね。家族は泣いたりできないんですよ、そこでは。

だから、本当は新しい病院には必ず家族と別れる部屋があって、そこで数時間でも家族の人が一生懸命さすったり撫でたりするといいなと思います。実は、人間って生きている時から、いろいろな人間関係でぐるぐる巻かれていくんですよ、いろんなものが巻かれていくのです。

亡くなる時に、家族がさすったり、ありがとうって声をかけることは、その結んでいる糸を少しずつ解いていくことなのです。だから解くことで仏になることができるのです。家族がゆっくり、その人の何十年かの人生を、きれいに解いてあげられる時間が病院で持てるようになってくれたらいいなと思うんですね。

治せること(病気)は、全部お医者さんが治してくださって、それでも治らない最後の部分は、家族と一緒に、時間を共有できるということが21世紀のうちにキチッとあってくれたらいいなと、そうすると小さな人達も、亡くなるってということがこういう事だと気づいた時に、今生きている自分の「いのち」を、人の「いのち」も大切にすることができるのです。

亡くなった人は病院の裏から出すんですからね。それは病院としては分かるんですけども、本当は入ったところから出てくれた方が、もっと良かったかもしれないのです。

このことについてはいろんな考え方があるでしょうが、でも最期の別れる時間だけは、家族に返してあげられるような状況が少しでもあってくれると、今までずっと憎しみあっていた親子でも、最期の瞬間には心を開くことができるってということが、死の果てしない尊厳なので、そういう時間をちょっと持てるようになってくれるといいな、別れ方がうれしい、そういう病院になってくださるといいな、というふうにも今私は思っています。

みずゞさんは「しあわせ」という字をこんなふうに考えています。

私たちは辛いことがあると、幸せの方がずっ

といいと思います。でも、この世の中すべて二つで一つですが、辛いことから始まります。

例えば、赤ちゃんはお母さんの子宮という大きな宇宙から旅をしてきてこの地上に生まれる時に、お母さんの心音にも体温にも全部別れをして、この世の中に出てきます。果てしなく大きな旅です。

その不安な気持ちをいっぱい持って生まれてきた時に、お母さんに抱きしめられて幸せになるのです。

だから、幸せなことがあって辛いことがあるんじゃないのです。辛い体験があって幸せになるようになっています。

だから、辛いという字に一本棒を引くと幸せになるようになっています。幸せという字は、辛いことから成り立っているのですね。

それなのに私達は、幸せの方が良いとずっと思ってしまうけれども、生まれてきた時から幸せな人は幸せを体験する事はありません。だって幸せってもっと欲しくなるからです。十分幸せなのにまだ足りない、足りないと思ってしまうからです。だから辛いことがあって、一本棒を引くと幸せという字です。

でもこの字(の形)は「案山子さん」ですから、倒れそうになっちゃうんですね。そうすると、自分一人の幸せで終わってしまいます。

みずゞさんの「しあわせ」は、この字ではありません。

「こぶとり」というとってもかわいい詩があります。その中でこんなふうに使っています。

#### こぶとり ～ おはなしのうたの一

正直爺さんこぶがなく、  
なんだか寂しくなりました。  
意地悪爺さんこぶがふえ、  
毎日わいわい泣いています。

正直爺さんお見舞だ、  
わたしのこぶがついたとは、  
やれやれ、ほんとにお氣の毒、  
も一度、一しよにまいりましょ。

山から出て来た二人づれ、  
正直爺さんこぶ一つ、  
意地悪爺さんこぶ一つ、  
二人でにこにこ笑つてた。

この「幸」は正直爺さんがにこにこ笑ってい

るだけの幸せです。意地悪爺さんはこぶがふえてわいわい泣いているのです。

みすゞさんの「しあわせ」、21世紀の「しあわせ」は、横に人偏がついている「倅」です。

お友達が倅な時に私も倅。  
私が倅な時にお友達も倅。

この人偏がついた倅が21世紀の倅。人と人が人と自然が、自然と宇宙がすべて「こだま」しあい、響きあい、支え合って生きていく「倅」です。

今日ここにいらっしゃる先生方は、もう小学校の国語の試験はないので、倅と書く時に、人偏をつけて下さったら良いなあと思います。そうするとうれしさが飛ぶんだということです。この字が、金子みすゞさんの倅なんだなと思って下さるとうれしなと思います。

みすゞさんという人は、この世の中すべてが二つで一つと考えている人です。例えば、「浜の石」という詩でこんなふうに詠んでいます。

#### 浜の石

浜辺の石は玉のよう、  
みんなまるくてすべっこい。

浜辺の石は飛び魚か、  
投げればさっと波を切る。

浜辺の石は唄うたい、  
波といちにち唄ってる。  
ひとつびとつの浜の石、  
みんなかわいい石だけど、  
浜辺の石は偉い石、  
皆して海をかかえてる。

誰も気づかなかったのです。みんなその海を抱えているちっちゃな名もない石を踏んで、海は大きいな、凄いなと大きいものだけを目立つものだけを見てしまっていました。

でもみすゞさんはきちっと見ているので、「大きいもの」には「小さいもの」「目立つもの」には「かそけきもの」があって、この世の中は成り立っています。

どっちが大切じゃなくて、みすゞさんはどちらもあっての一つなんだということを知っていた人です。

私達がこの詩のことをきちっと思ったら、地球という環境の変え方も少し楽になるかもしれません。

つまり、私達は地球というお母さんの子どもですから、「私も小さな地球」だということです。私という地球が環境を変えたら、そしたら大きな地球のお母さんも変わるということです。

あんな大きな地球のために小さな私は何もしなくていいやと思うかも知れないけど、私にできることがあるということです。

だって、あの大きな海はあの小さな石が支えているのと同じで、大きな地球は私達一人ひとりが支えていると思ったら、私にもできることがあるんだと思ったら、ちょっと考えることができるだろうなと思います。

三日前に昼の月が出ていましたけど、僕は昼の月を見るといつも、かわいいなあとか壊れそうな月だとしか思っていなかったんですけど、みすゞさんは、その時に「あちらの町の子どもらは、明かりがなくて寂しいだろう」って書いているんですね。

「そうか、私達に昼の月があるということは、向こうの夜には月がない」ということなのですね。「そうかあ、あるということは、向こうに無いということなんだ、こっちにないということはあるということなんだ」と考えると、何も私だけの幸せということではなくて、ちょっとゆらいでうれしいことに出会えるような気がします。

金子みすゞさんの詩を読んで下さると、何かうれしいことがたくさんあります。

今、多くの病院でみすゞさんの詩集を置いて下さるところがあります。患者さんがとてもそのことで、うれしい出会いをしていることがあるのだそうです。何かのチャンスに、みすゞさんの詩を読んで下さると良いなと思います。そして、もしお時間があったら、さっきパンフレットをいただいたら下関と山口と萩と宇部の観光案内は入っていたんですけど、長門のがなかったのですね。木下先生はなぜ入れていないのかと思いましたが(笑)。

ここ宇部から車で1時間ちょっとですから、何かの機会で来られることがあったら、6年間で80万人近くの、本当にたくさんの方がみすゞさんを尋ねて来て下さっていますが、いらして下さることがあったら、受付や売店の方に、「みすゞさんの詩いいね」って、ちょっと声をかけ

て下さるといいなと思います。どんなに声をかけて下さっても、入場料は安くならないんですけども、記念館の人が倅せになるんですね。この記念館の人が倅せになることが、この人偏を付けた倅で、記念館に来て下さった方は絶対に倅せになって下さいますから、それを少し回して下さるといいなと思います。

今日は、中国四国の医師会の大切な会にお呼び下さいます、そして大切な時間をいただきましたことに感謝申し上げます。

みずゝさんの詩は「あなたと私」というまなざしなのですね。ぜひ「そちらの私」と「こちらの私」なんだと、「患者さんの痛みは私の痛みなんだ」って思っていたら、患者さんは本当に良いお医者さんに出会ったということだ

と倅せな気持ちになることでしょう。

そんなことも何かのことで思い出して下さいたらありがたいと思います。感謝申し上げて終わりたいと思います。

どうもありがとうございました。

※1 ちひろさん (童謡詩人金子みずゝの心を唄うシンガーソングライター)  
<http://www.chihirosound.com/>

詩・『金子みずゝ童謡全集』(JULA出版局)より

金子みずゝ記念館  
 〒759-4106 山口県長門市仙崎1308  
 TEL : 0837-26-5155 FAX : 0837-26-5166  
<http://www.city.nagato.yamaguchi.jp/misuzu/>

(広報課)

## 日本医師会女性医師バンク

求職者・求人者向け **登録受付中**

**登録・紹介 無料**

**日本全国、会員でない方も登録できます**

求職(求人)登録票のご請求は、中央センターまでお申込下さい

### 日本医師会女性医師バンクの特色

**無料** 登録・紹介等、手数料は一切いただきません。

**日本全国** 日本全国の医師、医療機関にご利用いただけます。(会員でない方も登録できます。)

**個別対応** 就業に関するご相談は、コーディネーター(医師)が、丁寧に対応いたします。

**予備登録** 今すぐに働く予定のない方もご登録いただけます。

**秘密厳守** ご登録いただいた情報は、適正に管理し、秘密は厳守いたします。

このたび、社団法人日本医師会は日本医師会女性医師バンクを開設いたしました。(平成19年1月30日開設) 日本医師会女性医師バンクは、就業を希望する医師に、条件にあった医療機関を紹介し、勤務環境の調整を含め、採用に至るまでの間の支援を行い、再就業後も様々なご相談に応じます。

厚生労働省委託事業 **日本医師会女性医師バンク** 厚生労働大臣許可 13-ユ-301810

(ご連絡・お問合せ先)

**中央センター**  
 〒113-8621 東京都文京区本駒込2-28-16  
 日本医師会館 B1  
 TEL : 03 (3942) 6512 FAX : 03 (3942) 7397

(各拠点)

**東日本センター**  
 日本医師会館内

**西日本センター**  
 福岡県医師会館内